

総務省が5月末に発表した労働力調査によれば、非正規雇用者数が全雇用者数に占める当年3月までの平均割合は34%近くに及ぶという。この数字の背景に進行している労働市場の過酷な実体から湧きあがって来る「生きさせる！」という叫びが「フリーターユニオン」「派遣ユニオン」といった新たな共同性の端緒を浮上させている。

若者を中心とする流動的な労働者階層は、経済の同心円上に形成されている大衆の平均的な生存形態から弾き出されてしまう自らの不可避性を、求心的に捉え返し、別の生き様を模索し始めているのではないか？

「フリーターユニオンふくおか」の小野俊彦委員長（32才）は、記者のインタビュールにに応じて、イタリア語のプレカリオから派生した「不安定な雇用を強いられた人々」を表す「プレカリアート」という言葉を軸に「アタラシイ労働運動」を目指し、現代の「生きづらさ」を語りたいと述べている（6月3日朝日朝刊）。

彼らが主宰した「五月病祭」の仮装パフォーマンズが、いつか独自の回路を辿って38年前の或る〈仮装〉パフォーマンズの意味に橋を架けて飛翔することがあるかもしれないな、という妄想が湧いてくる。その時は死んでいても参加したいものだ（笑い）。

このような妄想は、ネット上でたまたま出会う複数の象徴的な表現の印象にも由来している。例えば「ハトポツポツ批評通信」を無料配信している自称文学批評家でフリーターの青木純一氏の表現等がそうである。登録者への配信とサイトでの公開をほぼ同時にやってくれるのでシャイな自分にはうれしい。20才も年長のがさつな文学音痴が、識見豊かな若い人の深い洞察を心地よく読めるその文体も不思議である。関心を寄せるのは次のような箇所だ。

漱石の「夢十夜」を、長期に亘って丹念に掘り下げた後、『この問いから見るならば、「明治の精神」は明治という時代に所属しているわけではありません。しかし、ぼくたち現代人がその精神を所有しているわけでもありません。「明治の精神」はぼくたちの現在をたしかに条件づけながら、なおこの時代の記憶の果てにある時空間の星座として存在しています。漱石もまた明治という時代に所属しようとしたのではないし、また時代の共同観念に侵蝕されたのでもありません。漱石は、明治という時代をひとつの時代として画する危機の意味を、自分の思考の内部にいわば奪い返しているのです。「明治の精神」と漱石が呼んだものの実質は、近代の悪夢の因果律を、ぼくたちの近未来にまで照らし出す「黒い光」の核心であり、近代の心的世界を展開する精神の詩的な核心のことです。』（『夢十夜』というギャラリー（23））

こう述べつつ、彼は漱石の表現過程を〈無所属化の運動〉として捉えなおす。私は思わず共感の相槌を打ちながら、同時に若い層の幻想世界に拡大し始めている時代や共同性に対する〈無所属化〉の欲動の適確な〈文学〉的表現ではないか、といった深読みに誘惑されるのである。

フリーターやニートと呼ばれる現象は、現象としてみる限り「定職を持たない」多数派と「定職を持たない」少数派に分岐しているだろう。小野氏や青木氏は高学歴・高能力の言わば過渡的に落ちこぼれたエリート側面も持っているにちがいない。しかし、「持て

ない」不可避性と「持たない」意識性の内外の葛藤を社会的合流へ共闘の方向に解放し、そこからしか見えてこない文明の歪さに〈否〉を対置し続けてほしいと願う。長続きする職を得るかどうかは切実な問題だが、結果のいかに関わらず自己に内在する〈フリーター性〉を生涯に亘って仮装し切ることが重要なのだ。権力構造への帰属を強制する文明的反動は常に発生してくるだろうが、〈無所属化の運動〉は既成の文化やメディアや政治性に足をすくわれることのない創造への条件を秘めてもいるのだから。

かつて学生達が、労働者予備軍の状態を逆用して、社会の変革及び同比重で自分自身の変革を志向した時代よりも、〈現在〉の拘束性は深刻の度を増している。数十年前渦中にあった大多数の若者は、「生活はもつと良くなる。チャンスは平等。落ちこぼれるのは努力不足」といった日々増幅される恫喝の声と企業実績偏重の経済重力のもと、いや、何より各々の〈生活〉概念の逆バリケードの前で、予備軍から正規軍へと成り上がって(?) いった。この〈敗北〉の過程は、物資や資本の溢れによる恩恵とは裏腹に思いがけない桎梏を蔓延させていく。若い幻想の生成へ解体の循環時間は極度に短縮を強いられ、利害関係に収斂し、自然かつ自立的な共同化の契機を失って拡散していく。屈折し沈殿する欲動は病み疲れた社会の局所において孤立した〈犯罪〉となつて現象し消費される。

人類の幻想過程が物質過程を呑み込むように発生した闘争の本質は、まだ共有の〈場〉を創り出していない。しかし、無意識の基底深く〈存在〉しているのだ。

「へ変革可能性の第一歩が大衆的に確認されるまで旧大学秩序の維持に役立つ一切の労働(授業、しけん等)を放棄する」と一枚の宣言文が或る大学の構内に張り出されて40年近い時が流れた。

松下昇は最初の自覚的〈フリーター〉であった。へ刊行委に委託されているパンフ群と未刊資料は「生きづらさ」を交換して生きる始めるための基礎データであり、データへのアクセス回路を新しい兆しに向かつて公開せよ、とささやき続けている・・・。

《とここで、「存在と言語」の刊行主体は、へ刊行委的テーマを模索する野原氏へからの「本の販売宙吊りII包括的な会議の実現」という要請に対し、逆に「そちらの勝手なネット販売には何の意義も共感も価値も見出せないから、松下がパンフに収録している自分の文章を削除せよ」との趣旨を要求してきたという。彼(ら)が松下の運動に関わったというのは本当か? 松下からパンフを受け取った段階で、そのパンフへの異議ないし意見の開示責任を共有した人間から今頃こんな要求が出るはずがない。恥ずかしいと思わないのだろうか?

「村尾本」に対して「削除せよとか、破棄せよ」といった発想は、へ刊行委的原則に照らしてありえないが、本質的に松下の表現運動とこの問題を切り離して扱うことはできないことがはっきりしている。国家・マスコミ・個人による批評群を、批評の対象である松下本人が集約して刊行した「批評集」において、「自分の文章を無断で収録された」あるいは「自発的に掲載させた」と、思っているだけ多くの人の意見も聞いて見なければならぬ。より拡大的な〈場〉の設定を目指すべからう。今まで主に本の出現過程を問題にしてきたが、中身についても共同で検証して行ければ面白い。ネットを含むパンフの情宣が「勝手」なことかどうかもその過程で明らかになっていくだろう。》